

氏 名	イ チュン ジャ 李 春 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 190 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	東アジアにおける杜の信仰と持続 ——台湾、日本、韓国の比較を中心に——

論文調査委員 (主査) 教授 宮本盛太郎 教授 伊 從 勉 教授 山 田 誠

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、台湾・日本・韓国という3つの地域における「杜もり」の現地調査に基づき、3地域を相互に比較しつつ、「杜」がどのような象徴性をもつのか、「杜」は社会変動の中でどのような運命を辿ったのかを明らかにしようとした試みである。「杜」とは、申請者によれば、信仰の対象である「こんもりした」森または1本の神木を中心とする「モリ」のことである。以下本論文の内容を要約する。

まず、申請者は、序章において、「杜」の定義を行い、本論文の2つの目的と従来の諸研究の欠落部分を指摘し、本論文の独自性を明らかにしている。さらに、調査地選定の理由と研究方法について述べている。

第1部第1章では、台湾の「杜」を取り上げる。従来の研究文献・古文献を整理して、「大樹公」「土地公」の関係に言及し、台湾の「杜」の立地の特徴と樹木の種類を表にする。ついでカミの両義性、幸福を得た人は地域の人々にその幸を還元する必要があること、「杜」のカミと子供とが親子関係を結ぶ「義子・義女」信仰があることを指摘し、道教と「杜」の関係、祭礼の特徴を明らかにしている。

第2章では、日本の「杜」を取り上げ、福井県大島半島にある「ニソの杜」と沖縄の「ウタキ」について、研究文献・古文献の検討の後、現地調査に基づいて立地条件の特質、樹木の種類、祭礼の様子を描写し、第3章では、韓国の「堂山」について、研究史の総括の後、立地条件、霊験談、神木の種類等について記述している。

第4章では、第1部のまとめとして、まず東アジア（具体的には台湾・日本・韓国）の「杜」と祭礼の比較をしている。1本の木が神木である比率をみると、もっとも高いのは台湾、ついで韓国、日本の順で、「杜」は水と深く関わる所にある。場所としては、台湾では町や住宅街、田など平地が多く、韓国では村の入口にあり、日本では山裾が多い。台湾の「杜」の多くが町の中であって、日常的に人々が様々な活動に利用していることは、他の2国の「杜」とは異なる。神木の種類で一番多いものは地域によって異なるが、特定の種類の神木が圧倒的に多いということは共通している。祭官(主)は台湾と韓国では毎年選出され、日本では順番制である。村の祭礼後「共食」することは3地域に共通する。「杜」は土地への信仰の象徴としての意味をもっている。清らかな特定の樹木は「杜」の「依り代」であり、樹木の実在とカミの霊力の象徴的な場所が「杜」である。「杜」と人間との関係は相互可変的であり、「杜」のカミは日常の安定を保証し人間の危機を救うとともに、人間が「杜」に何らかの行為をした時には必ず反応があると解釈されることもある。「杜」と人間は可変的な緊張関係の中にある。

第2部では、社会変動が「杜」とどのように関係するかを考察している。第2部はⅠ・Ⅱにわかれ、Ⅰでは社会変動の中でどのような事態が進行したかを検討している。Ⅰの第1章では、台湾の例を検討し、かつて風水の力で村や農水路の水を守るために作られた「杜」や土地廟が、近年地域のコミュニティの場として新たに再創造されつつあることを指摘している。申請者は1950年から現在までを3期にわけて、この再創造の過程を詳細に追っている。

Ⅰの第2章では、日本における社会変動と「杜」の関係について論じており、とくに「ニソの杜」のある大島半島で原子

力発電所の設置と土地改良事業とが「ニソの杜」とどのような関係にあったかを述べている。大島半島では、「杜」の伐採やニソ田の衰退がみられる反面、自らの信仰に基づいて新たに「杜」を作ったり復活させたりする例がある。

Iの第3章では、韓国の例を取り上げている。セマウル運動とキリスト教の影響で韓国では「杜」の減少がみられるが、近年韓国でも「伝統の否定」から「伝統の肯定」への変化が出始めている。たとえば、電車の路線が「杜」を通過することになった際、行政に「杜」の移転を陳情したり、新たに「杜」に祠を建て祭壇を作った事例がある。

第2部のIIでは「杜」を次世代につなぐための動きを検討している（「持続」のための努力の側面）。IIの第1章では、「杜」を守る人々の営みについて、台湾と日本の「ニソの杜」の例を説明している。

IIの第2章では、行政における保護措置を台湾、韓国、日本（京都市・沖縄県）について検討している。

最後に結論部で、本論文の2つの視点を確認し、全体のまとめを行い、「杜」を次世代へと「持続」させるための様々な試みが必要であることを強調している。なぜなら、人間または人間社会は、地球という場所で生を営み、清らかな自然の内にカミを発見し文化を育むからである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、信仰の対象である「こんもりした」森または一本の神木を中心とする「杜もり」について、台湾・日本・韓国における現地調査に基づく比較研究である。自然である「杜」は、それぞれの地域において、土着信仰・風水・生態の多面性と相俟って、様々な様相を呈し、そこでは多様な営みがなされるとともに、共通する普遍的な側面も少なくない。近年、都市化や開発の波は、信仰の対象である「杜」にまで押し寄せており、人々は心の拠り所としての「杜」を失おうとしている。

このような状況の中で、「杜」は何を象徴するのか、社会変動は「杜」に何をもたらすのかを浮き彫りにし、比較考察しつつ、人間と自然とカミの相互作用を新たな視点の下に提示しようとするのが本論文の眼目である。以下、本論文の卓越した点について述べてみたい。

まず、申請者は3カ国語に通じているので、この利点を最大限に生かしつつ、徹底したフィールド・ワークを行った。現地に留まり、詳細な調査を行った調査地は、全体で96カ所に及び、台湾29カ所（台中・草屯）、日本47カ所（福井県大飯郡大島半島・沖縄）、韓国20カ所（慶州・盈徳・永川）である。選定基準は、「巨木」が多く存在し、信仰の営みは異なっても「杜」そのものが信仰の対象であり、社会変動の中で「杜」の変容がみられる所である。大島半島の「ニソの杜」について本文中に示される、「杜」の名称・祀る家・ニソ田の有無・神木の種類・場所の特徴・祠の有無を示す一覧表、付録の部分に収められた台湾・沖縄県・韓国の調査地についての詳細なデータを示す20ページに亘る表、掲載許可を得て台湾で入手した貴重な行政資料、現地で撮影された写真は、それ自体読む人を圧倒する。

さらに、申請者は東アジア3カ国の相互比較を説得的に行っている。神木の種類の比較、立地の態様の相違、祭主の決定方法の比較、他宗教との関係等を検討するとともに、対照表を作成し、模式図を示して、明快に説明している。

申請者は、方法論として、東アジア3カ国の96カ所の「杜」の諸属性を調査に基づいて明らかにし、相互比較するとともに、人間と自然・カミとの相互関係を理論的に検討する。申請者は、清らかな特定の樹木の象徴性に注目し、樹木の実在とカミの霊力の象徴的な場所が「杜」であるとする。人間と「杜」の関係は相互的可変的なものであり、「杜」のカミは日常の安定を保証し危機から人間を守るとともに、人間が「杜」に何らかの行為をなした時には必ず反応がある。人間と「杜」との間には、可変的な緊張関係がある。申請者は、このように解釈することによって、アニミズムを単なる「灵力」と考える素朴な理論に異を唱える。

さらに申請者は、社会変動の中で「杜」の具体的な変容過程を追究し、杜を次世代に「持続」させるための人々の行為と「杜」の保存に関する3カ国の条例などの「杜」の維持・管理の側面を明らかにした。従来の「杜」信仰の研究は、現状報告の地点に止まるものが多く、社会変動の視点をも取り入れて、「杜」信仰の空間的変容、日常・非日常の状態における「杜」・カミと人間との関係をダイナミックに捉える考察は極めて少なかった。とくに、都市の小公園化を促進する台湾の「杜」の事例は、今後示唆するところが大きいであろう。さらに韓国や日本でも、わずかではあるが現在の大きな社会変動の中で「杜」信仰を復活しようとする動きがあるという貴重な報告もなされている。

人間・環境学研究科は、学際的な領域を研究し、人間と自然の共生を謳い、現代における地球規模の環境問題の解決を目指す大学院である。文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座の目的は、日本を中心としたアジアの文化・地球環境の学際的、総合的な研究にある。本論文は、東アジア（台湾・日本・韓国）の諸地域の「杜」信仰のあり方を比較しながらなされた、民俗学・宗教学・人類学・建築学・社会学・経済学・政治学の諸領域に関わる重厚な研究であり、大学院・専攻・講座のいずれの主旨にもぴったりと適合するすぐれた論文である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。